

# 自我防衛機制と性格特徴の関係

山本 都久

(2001年10月22日受理)

## The Relationship between Ego Defense Mechanisms and Traits of Personality

Kunihisa YAMAMOTO

キーワード：自我防衛，合理化，投射，反動形成，パーソナリティ

Key words : ego defense, rationalization, projection, reaction formation, personality

### 目 的

日常生活の中では、我々の心に生じた欲求はいつも充足されるということでは決してない。多くの欲求は、外界の圧力や危険に阻止されたり変更を求められたりして充足されにくかったり、また充足されたら蒙るであろう罰を恐れて充足されなかったり、更には充足した後で罪悪感を抱かなければならないことを恐れて充足されないままになったりしている。欲求が充足されないままであるという心の状態は欲求不満な状態で、決して快いものではない。そこで我々は自我防衛機制を働かせて、そのような状態の解消を図っているのである。

ところで、自我防衛機制とは、感情や考えや記憶を無意識あるいは意識的な心理操作によって、無意識下に押しやったり・歪めたり・変更したりして、欲求不満な状態を緩和したり・回避させたりして、自らが傷つくのを防衛している自我の機能のことである (Freud, A., 1936)。自分を傷つけるもの、あるいはそう思えるものから自分を守ろうとするこの心の働きには、投射、取り入れ、同一視、合理化、置き換え、補償、代償、昇華、転移、反動形成、逃避、退行、攻撃など多くのものがあげられるが、それらを働かせて欲求不満の解

消を図ったとしても、いつも簡単に成功するとは限っていない。なぜなら、それらは本来、欲求の充足を果たす機能ではないからである。したがって、上手に機能させないとかえって欲求不満を増大さすことになってしまう恐れがある。そのためには、人々は自我防衛機制の使い方に長ける必要がある。一般に人々は、日常の欲求不満場面での使用体験を通して、周囲から期待される年齢相応、立場相応な使い方を学習しているのであるが、そうした人々の自我防衛機制の種類と使い方の学習は、往々にして使った自我防衛機制の効果（欲求不満の解消の度合いと使い易さ）によって取捨されるので、偏って習熟されがちである。こうした人々の自我防衛機制の使い方の習熟の違いは、また人々の性格の違いを結果もたらすことにもなっている。Levitt, E.E. (根本, 1986) はそうした自我防衛機制と性格特性の関係を理論的に検討した研究を行っている。Plutchik, R., Kellerman, H., Conte, H.R. (1979) や Andrews, G., Pollock, C., Stewart, G. (1989) や Mulder, R.T., Joyce, P.R., Sellman, J.D., Sullivan, P.F., Cloninger, C.R. (1996) も質問紙法で各人の自我防衛機制の使い方を調査し、人々のそれらの使い方と性格との関係を検討する研究を行っている。本研究は、Plutchik, R. ら

の質問紙法（8つの自我防衛機制を97項目で調査）に見られる欠点、すなわち(1)質問項目の構成概念妥当性の低さと(2)質問内容に偏りが認められる2点を改良して、24項目で8つの自我防衛機制が測定できる簡易尺度を構成し、それをを用いて大学生の自我防衛機制の使い方と彼らの性格との関係を検討するために行ったものである。

## 方 法

(1)被験者 大学1年生の52名を被験者にした。

(2)調査用紙 被験者にYG性格検査と自我防衛機制の測定用紙への回答を求めた。自我防衛機制の測定用紙は、反動形成、攻撃、抑圧、投射、補償、逃避、合理化、拒絶の8つの防衛機制に関する24の質問項目（各3項目ずつ）で構成されたものであり、それらの質問項目は、Freud,A.(1936)や前田重治(1990)、田畑治(1984)、我妻洋(1981)らの防衛機制の内容説明を参考に、筆者が構成概念妥当性を吟味しつつ案出したものである。各質問項目への回答は、「日常の生活で各質問項目のようなことをどの程度行っていますか」という指示にしたがって、程度を5段階評定（いつも、かなり、ときどきは、ちょっとは、ぜんぜん）で表わすようにされている。

具体的な質問項目は以下の通りである。

- 1 人前では、思いとは裏腹なふるまいをしてしまう(反動形成)
- 2 悪口をいわれたらすぐ言い返します(攻撃)
- 3 言うともずいことは、言わないようにしています(抑圧)
- 4 失敗の責任をつい人のせいにしてしまうことがあります(投射)
- 5 自分のいたらないところは、得意なことをして埋め合わせるようにしています(補償)
- 6 居ずらくなったら、その場を離れるようにしています(逃避)
- 7 気にさわる人とは目を合わさないようにします(拒絶)
- 8 ちょっとしたウソについて、言い逃れを図ることがあります(合理化)
- 9 邪魔する人にはあたりちらしてしまいます

(攻撃)

- 10 人には自分のイメージ(印象)をよくするようにふるまっています(補償)
- 11 気のある人にそっけない態度をとることがあります(反動形成)
- 12 わずらわしく感じたら、その場から逃げ出します(逃避)
- 13 腹の立ったときは、相手と口をききません(拒絶)
- 14 自分のことをたなに上げて、すぐ人の非をついてしまいます(投射)
- 15 人前では、腹が立つことをいわれても平静を装っています(抑圧)
- 16 面白くなかったら、すぐサボってしまいます(逃避)
- 17 人前では、弱みを見せず、気丈にふるまっています(補償)
- 18 つじつまの合うことを言って、その場ごまかすことがあります(合理化)
- 19 いやなことは思い出さないようにしています(抑圧)
- 20 人前では、きれいな人にもやさしくふるまっています(反動形成)
- 21 ムカつく相手には、悪口をさんざんいってやり込めています(攻撃)
- 22 自分のいやな面(性格)を親のしつけのせいにしてしまうことがあります(投射)
- 23 気に入らない人は無視します(拒絶)
- 24 いいわけして自分の立場を取りつこうことがあります(合理化)

(3)データ処理の方法 各被験者のYG性格検査の下位尺度(D, C, I, N, O, Co, Ag, G, R, T, A, S)ごとの因子得点と各自我防衛機制の使用頻度を算出し、それを基に各下位尺度の平均標準点値と標準偏差値並びに各自我防衛機制の平均使用頻度と標準偏差値を求め、更にYG性格検査の下位尺度と各自我防衛機制間の相関係数を求めた。次にその相関係数を用いて、各自我防衛機制を基準変数、YG性格検査の下位尺度を説明変数にあてて重回帰分析を行った。ところで、重回帰分析では類似した説明変数のないことが要件の1つである。そこで、YG性格検査の

下位尺度間に類似したものがあるかどうかを検討するためにクラスター分析を行った。その結果、[DCNO], I, Co, Ag, G, R, T, A, Sの9つのクラスターが得られたので、それらを説明変数とすることにした。[DCNO]については、この中で重回帰分析を行うときの基準変数と最も相関の高かったものを選んで、それをその基準変数で重回帰分析を行うときの説明変数の1つとした。そして、変数増減法による重回帰分析処理を行った。

### 結 果

表1は自我防衛機制が反動形成の場合の重回帰分析の基本統計量を示したものであり、表2はその重回帰分析の結果を示したものである。表2では、変数間の相関関係に歪み現象が生じていたために、基準変数と説明変数の相関係数よりも標準偏回帰係数の値が全て大きい値になっていた。しかし本研究は重回帰方程式の作成を問題にしたものではなくて、基準変数への説明変数のかかわり方を推測・予想するだけであるから、表の結果から、自我防衛機制の反動形成はYG性格検査の抑鬱性(D)の高い人に使用されやすい傾向のあ

ることが明らかにされたといえる。

表3は自我防衛機制が逃避の場合の重回帰分析の基本統計量を示したものであり、表4はその重回帰分析の結果を示したものである。変数間の相関関係に歪み現象が生じていたために、表4は表2と同様に相関係数よりも標準偏回帰係数の値が全て大きい値を示していたが、結果から逃避は主観性(O)の高い人に使用されやすく、劣等感(I)の強い人に使用されにくいことが明らかにされた。

表5は自我防衛機制が抑圧の場合の重回帰分析の基本統計量を示したものであり、表6はその重回帰分析の結果を示したものである。変数間の相関関係に歪み現象が生じていたために、表6も表2と同様に、相関係数よりも標準偏回帰係数の値が全て大きい値であったが、結果から、抑圧は劣等感(I)の強い人に使用されやすい傾向のあ

ることが明らかにされた。表7は自我防衛機制が拒絶の場合の重回帰分析の基本統計量を示したものであり、表8はその重回帰分析の結果を示したものである。表8にも変数間の相関関係に歪み現象が生じていたために、一部に相関係数よりも標準偏回帰係数の値が大きくなった説明変数が認められたが、結果から、拒

表1 基本的統計量(反動形成の場合)

変 数	平均値	標準偏差値
YG D	3.057	0.872
YG Ag	2.903	0.934
YG G	2.980	0.851
反動形成	6.173	2.064

表2 変数増減法(Fin 1.8, Fout 1.8)に  
る重回帰分析の結果(基準変数は反動形成)

変 数	標準偏回帰係数	相関係数
YG D	0.340 *	0.266
YG Ag	-0.233	-0.123
YG G	0.199	0.180

重相関係数 R=0.394(R<sup>2</sup>=0.155) F=2.945 \*  
\*\* p<.01 \* p<.05 △ p<.1

表3 基本的統計量(逃避の場合)

変 数	平均値	標準偏差値
YG O	3.288	0.914
YG I	3.192	0.990
YG A	3.423	0.750
逃 避	4.903	2.069

表4 変数増減法(Fin 1.8, Fout 1.8)に  
る重回帰分析の結果(基準変数は逃避)

変 数	標準偏回帰係数	相関係数
YG O	0.422 **	0.377
YG I	-0.340 *	-0.038
YG A	-0.249	-0.238

重相関係数 R=0.481(R<sup>2</sup>=0.232) F=4.840 \*\*  
\*\* p<.01 \* p<.05 △ p<.1

表5 基本的統計量 (抑圧の場合)

変数	平均値	標準偏差値
YG G	2.980	0.851
YG I	3.192	0.990
YG O	3.288	0.914
YG T	3.076	0.882
抑 圧	6.019	2.380

表6 変数増減法(Fin 1.0 ,Fout 1.0) による重回帰分析の結果 (基準変数は抑圧)

変数	標準偏回帰係数	相関係数
YG G	0.236	0.232
YG I	0.305 $\Delta$	0.131
YG O	-0.227	-0.164
YG T	0.141	0.102

重相関係数  $R=0.383(R^2=0.146)$   $F=2.023$   
 \*\*  $p<.01$  \*  $p<.05$   $\Delta$   $p<.1$

表7 基本的統計量 (拒絶の場合)

変数	平均値	標準偏差値
YG R	3.500	0.980
YG Co	3.019	1.038
YG S	3.384	0.843
拒 絶	4.153	2.824

表8 変数増減法(Fin 1.6 ,Fout 1.6) による重回帰分析の結果 (基準変数は拒絶)

変数	標準偏回帰係数	相関係数
YG R	0.288 *	0.269
YG Co	0.230	0.266
YG S	-0.185	-0.082

重相関係数  $R=0.392(R^2=0.154)$   $F=2.920$  \*  
 \*\*  $p<.01$  \*  $p<.05$   $\Delta$   $p<.1$

表9 基本的統計量 (合理化の場合)

変数	平均値	標準偏差値
YG Co	3.019	1.038
YG R	3.500	0.980
YG I	3.192	0.990
YG A	3.423	0.750
合 理 化	4.403	2.041

表10 変数増減法(Fin 1.3 ,Fout 1.3) による重回帰分析の結果 (基準変数は合理化)

変数	標準偏回帰係数	相関係数
YG Co	0.504 **	0.523
YG R	0.402 **	0.485
YG I	-0.223	0.067
YG A	-0.158	-0.190

重相関係数  $R=0.688(R^2=0.474)$   $F=10.614$  \*\*  
 \*\*  $p<.01$  \*  $p<.05$   $\Delta$   $p<.1$

表11 基本的統計量 (投射の場合)

変数	平均値	標準偏差値
YG Co	3.019	1.038
YG R	3.500	0.980
YG T	3.076	0.882
投 射	4.192	2.058

表12 変数増減法(Fin 1.3 ,Fout 1.3) による重回帰分析の結果 (基準変数は投射)

変数	標準偏回帰係数	相関係数
YG Co	0.306 *	0.401
YG R	0.291 *	0.311
YG T	-0.169	-0.202

重相関係数  $R=0.498(R^2=0.248)$   $F=5.285$  \*\*  
 \*\*  $p<.01$  \*  $p<.05$   $\Delta$   $p<.1$

表13 基本的統計量（攻撃の場合）

変数	平均値	標準偏差値
Y G A g	2.903	0.934
Y G R	3.500	0.980
Y G I	3.192	0.990
Y G C o	3.019	1.038
攻撃	3.442	2.562

表14 変数増減法(Fin 0.5, Fout 0.5)による重回帰分析の結果（基準変数は攻撃）

変数	標準偏回帰係数	相関係数
Y G A g	0.124	0.403
Y G R	0.269 *	0.378
Y G I	-0.306 *	-0.150
Y G C o	0.351 *	0.335

重相関係数 R=0.562(R<sup>2</sup>=0.315) F=5.423 \*\*  
 \*\* p<.01 \* p<.05 △ p<.1

絶は衝動的な性質（R）の強い人に使用されやす  
 いことが明らかにされた。

表9は自我防衛機制が合理化の場合の重回帰分析の基本統計量を示したものであり、表10はその重回帰分析の結果を示したものである。この場合も変数間の相関関係の一部に歪み現象が生じていたために、相関係数よりも標準偏回帰係数の値が大きくなった説明変数が一部認められたが、結果から、合理化は不満が多い、人を信用しない性質の人（C o）や衝動的な活発さ（R）の高い人に使用されやす  
 いことが明らかにされた。

表11は自我防衛機制が投射の場合の重回帰分析の基本統計量を示したものであり、表12はその重回帰分析の結果を示したものである。表12の結果から、投射は合理化の場合と同様に不満が多い、人を信用しない性質の人（C o）や衝動的な活発さ（R）の高い人に使用されやす  
 いことが明らかにされた。

表13は自我防衛機制が攻撃の場合の重回帰分析の基本統計量を示したものであり、表14はその重回帰分析の結果を示したものである。変数間の相関関係の一部に歪み現象が生じていたために、

表15 基本的統計量（補償の場合）

変数	平均値	標準偏差値
Y G R	3.500	0.980
Y G G	2.980	0.851
Y G D	3.057	0.872
補償	5.326	1.947

表16 変数増減法(Fin 1.0, Fout 1.0)による重回帰分析の結果（基準変数は補償）

変数	標準偏回帰係数	相関係数
Y G R	0.230	0.313
Y G G	0.183	0.252
Y G D	0.166	0.196

重相関係数 R=0.388(R<sup>2</sup>=0.151) F=2.847 \*  
 \*\* p<.01 \* p<.05 △ p<.1

相関係数よりも標準偏回帰係数の値が大きくな  
 った説明変数が一部認められたが、結果から、攻撃は不満が多い、人を信用しない性質の人（C o）や衝動的な活発さ（R）の高い人に使用されやす  
 く、劣等感（I）の強い人に使用されにくいことが明らかにされた。

表15は自我防衛機制が補償の場合の重回帰分析の基本統計量を示したものであり、表16はその重回帰分析の結果を示したものである。表16からは、補償では特にかかわりのあると認められるような性格の特徴は明らかにされなかった。

## 考 察

欲求不満な状態が長く続いたり、不安や恐れに駆られたりすると、多くの人は無意識的にあるいは意識的に使い慣れた自我防衛機制を利用して自我の安定を図ろうとする。使い慣れた自我防衛機制の利用はいつも適的であるとは限らないが、安易に使った自我防衛機制で容易に欲求不満や不安や恐れが解消・回避できてしまうと、人はその利用の仕方を身につけてしまうようになる。した

がって、自我防衛機制の使われ方（あらわれ方）は人によって異なってくる。この違いは人の性格の違いをもたらすことにもなるのである。

本研究は人の自我防衛機制の使い方と性格特徴の関係を検討するために行われたものであった。各自我防衛機制とYG性格検査の各性格特徴との関わりを検討した重回帰分析の結果は、表17にまとめられた通りであった。すなわち、①自我防衛機制の反動形成はYGの下位尺度Dと正の関わりを示し、②逃避はYGの下位尺度Oと正の関わりを、下位尺度Iと負の関わりを示し、③抑圧はYGの下位尺度Iと正の関わりを示し、④拒絶はYGの下位尺度Rと正の関わりを示し、⑤合理化と投射はYGの下位尺度C<sub>o</sub>とRに正の関わりを示し、⑥攻撃はYGの下位尺度RとC<sub>o</sub>に正の関わりを、下位尺度Iと負の関わりを示した。

ところで、ここであげられたYGの下位尺度はグループ因子の情緒不安定因子や社会的不適応因子に関係したもばかりであった。したがって、それらと関わりがあった自我防衛機制は不適応な使われ方をしていることが明らかになった。Levitt,E.E.は「投射は批判的・偏狭さ・敵意性と関わりがあり、抑圧は抑制的・引っ込み思案と関わりがあり、否定は強情さ・自己主張的・想像力の乏しさと関わりが強い」ことを指摘し、それらの自我防衛機制は不適応なときに使われやすいことを指摘している。Johnson,G.J., Bornstein,R.F., Krukonis,A.B. (1992)は自我防衛機制と性格の関係を検討し、協調性や自己志向の性格は未熟な自我防衛機制スタイルと負の相関があり、新しいことを求める性格は未熟な自我防衛機制スタイル

と正の相関があったことを報告している。さらにPlutchik,R.らも暴力と投射・否認は正の相関を示したと述べている。それらの研究の検査用具はそれぞれ違っていたのに、自我防衛機制と性格の関係性についてはある程度似た傾向を示していたので、それらの関係性を一般化することができよう。また、それらから欲求不満の状態にいる人の行動理解は予測的に可能になるだろう。

## 要 約

本研究は、己れを守り、己れの立場を都合のいいものにするように機能しがちな人の自我防衛機制の使い方を質問紙法で測定して、それと人の性格特徴との関係を吟味するために行ったものであった。

結果、次のことがいえた。

『補償を除いた各自我防衛機制は、表17に示したようなYG性格検査のそれぞれの性格特徴と有意に関連していた。』

## 文 献

- Andrews,G., Pollock,C., & Stewart,G. 1989  
The determination of defense style by questionnaire. Archives of General Psychiatry, 46, pp.455-460
- Freud,A. 1936 The ego and the mechanisms of defense. New York:International Univ. Press.
- Johnson,G.J., Bornstein,R.F., & Krukonis, A.B. 1992

表17 自我防衛機制とYGによる性格特徴との関係

自我防衛機制	促進的に機能する性格特徴	抑制的に機能する性格特徴
反動形成	罪悪感の強い性質, 悲観的, こだわりが強い	
逃 避	空想的, 主観性, 過敏性	劣等感・不適応感が強い
抑 圧	自信の欠乏, 自己過小評価, 内気, 神経質	
拒 絶	衝動的な性質, 活発さ	
合 理 化	不満性, 不信性, 非協調的, 衝動的, 活発さ	
投 射	不満性, 不信性, 非協調的, 衝動的, 活発さ	
攻 撃	衝動的な性質, 活発さ	自信の欠乏, 劣等感・不適応感が強い
補 償		

Defense style as predictors of personality disorder symptomatology. *J. of Pers. Disorders*, 6, pp.408-416

前田重治 1990 「臨床精神分析学」誠信書房  
Mulder,R.T.,Joyce,P.R.,Sellman,J.D.,Sullivan,P.F.,  
& Cloninger,C.R. 1996

Toward an understanding of defense style in terms of temperament and character. *Acta Psychiatrica Scandinavica*. 93, pp.99-104

根本橋夫 1986 「防衛機制」：長島貞夫監修  
『性格ハンドブック』金子書房 pp.127-130

Plutchik,R.,Kellerman,H.,& Conte,H.R. 1979  
The structural theory of ego defenses and emotions. In C.E.Izard (Ed.). *Emotions in personality and measurement* New York :Wiley, pp.283-299

田畑 治 1984 「人格の力動」：星野命・河合  
隼雄編『心理学4 人格』Ⅱ章 有斐閣双書  
pp.15-32

我妻 洋 1981 「社会心理学諸説案内」一粒社  
pp.302-469